

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

小学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

残心

神奈川県
湘南ゼミナール 鴨居教室
小学6年 彼末 聞人

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

『残心』。ぼくは幼稚園のころから六年間続けている剣道のけい古で、何百回いや何千回も残心という言葉を目にしてきた。

「残心が出来ていない！」

「残心が大切なんだ！」と先生はけい古のたびにぼくらに言ってきた。だがその意味を深く考えずに過ごしてきた。

『残す心』と書いて残心。先生が言うには技を打った後にうでをのばしてぬける。そしてぬけた後には相手の方に振り返り、もう一度竹刀をスツと構え直すという事だった。それが美しくないとたとえ技がきまっても審判から一本を認めてもらえない。でもうでをのばすだけなら『残心』という言葉でなくともいいような気がする。何で『心』という文字が入るんだろう？ そのころはそう思っていた。

ぼくは今年の夏、とある大会に出た。その大会はぼくらだけではなく大人も試合をしていた。どの大人の試合も力強くて子供たちの試合よりずっとはく力があつてかつこよかった。その中でとても目を引く剣道をしている選手がいた。その選手はぼくの道場の先生だった。先生のけい古はとてもきびしいが、先生はとても強くてぼくのあこがれの存在だ。この日も先生はやっぱり強かった。なぜ目を引いたのかというと剣道をする姿がきれいだったからだ。背筋は糸でピンと引つ張られたようにのびていて、立ち姿だけでも強そうなオーラがみなぎっていた。そして打った後の残心は竹刀の先まで神経がいきわたり、打ち終わりなのに一息をいれるという事はなかった。すべての動きに気持ちがいこめられていて、その残心があるからこその技に対応できている事が分かった。ぼくは先生の試合を見ていて、残心とはたんなるポーズではなく心構えなんだなと思った。

そして試合後におたがいが「今日はありがとうございました」と頭をさげ合っていた。それを見たぼくはこう思った。剣道は相手がいるからこそできる武道だ。そのありがたさをおたがいに感じ合ひ、どんな試合でも相手に感謝をする。それも残心だという事が感じられた。

ぼくの尊敬する先生は七段になってもまだ剣道について学び続けていると言っていた。ぼくもこれからはもっと剣道を理解し、強くなれるようにけい古を続けていきたい。まず今日からは残心の心を大切に持つ事を意識して剣道に向き合っていきたい。